

氏 名	大 倉 祐 二
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 4908 号
学位授与年月日	平成 18 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	都市下層における就業構造の変容と90年代における野宿生活者の急増
論文審査委員	主 査 教 授 進 藤 雄 三 副 査 教 授 谷 富 夫 副 査 教 授 水 内 俊 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は野宿生活者の析出の構造的要因を解明することである。野宿生活者は90年代に「新た」に増した野宿者層と把握できる。というのも、まず第一に、大阪市では80年代までは野宿していたのは寄せ場の日雇労働者であり、野宿者がみられる地域は寄せ場である釜ヶ崎とその周辺部に限定されていたが、90年代に入って野宿者が増加、拡散し90年代末には野宿者が全市的に分布するようになったからである。ところが、第二に、これまで見られなかった地域の野宿者の野宿形態はこれまでとは異なったものであったからである。つまり、釜ヶ崎とその周辺地域での野宿形態は身体ひとつで野宿するという形態であったのに対し、90年代以降の釜ヶ崎以外の地域で増加した野宿者の形態は公園や河川敷などにテント等を張って常態的に野宿生活するという形態であった。本論文の目的はこの「新しい」野宿生活者の析出の過程を明らかにすることである。

本論文は都市下層における就業構造の変容の視点に基づいて分析を行っている。90年代に全国各都市で野宿者が急増したことを契機として、野宿生活者析出の構造的要因の解明を目的とした研究は行われている。ところが、この研究は90年代の野宿生活者がかつて「普通の労働者」として安定した生活、もしくはそれに近い生活をしていたにもかかわらず、脱工業化などの社会構造の変動によって、かれらは職そのものに就くことさえ不可能になり野宿生活することになったと主張している。

しかしながら、野宿生活者は従来の野宿者層と直前の階層を同一にしている、あるいはそれに近い層を経由した人びととみなすことができる。したがって、「普通の労働者」が野宿生活者化したのではなくて、都市下層の構造変容が野宿生活者の急増をもたらしたと考えられる。

本論文は三部七章構成になっている。第一部の第一章では先行研究について論じている。都市下層、もしくは寄せ場に関する研究は都市下層における就業構造の変容について分析してこなかったと指摘している。第二章では、戦後の都市下層の就業構造の変容について分析している。高度経済成長期に始まる技術革新と80年代の職業紹介雑誌の広範な流通、そして若年者や女性がパート・アルバイト化したことによる、パート・アルバイト市場の確立・拡大が従来の雇用構成に変化をもたらし、寄せ場を代表とする、伝統的な日雇労働の枠を狭めていたと考察している。

第二部の第三～五章では、野宿者急増の主要な要因と言われている90年代の釜ヶ崎への求人数の急激な減少の要因とそれによる状況の変化について考察している。その際、釜ヶ崎への求人データを求人の多くを占める近畿地方、または大阪府の建設産業に関するデータに照らし合わせ、釜ヶ崎が建設産業の地域労働市場にどのような接合しているのか、そしてその接合様式が80－90年代にかけてどのように変化しているのかについての分析を行っている。分析の結果、80－90年代にかけて建設産業における地域労働市場と釜ヶ崎との接合様式が変化したことを解明している。

第三部の第六、七章では、1999年に大阪市内の野宿生活者を対象に実施された「聞き取り調査」データを用

いて職業移動と地域移動についての分析を行っている。分析の結果、野宿生活者が初職から直前職に至るまで不安定な職歴を重ねて、全国を流動してきたことを明らかにしている。

以上のように、本論文では都市下層の就業構造が変容しているという視点に基づいて、野宿生活者の析出の過程を描き出している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、90年代に急増した野宿生活者の析出の構造的要因を、都市下層における就業構造の変容という観点から実証的に明らかにしようとした研究である。90年代に急増した野宿生活者の社会構造的説明は、これまでのところ同時期に世界的に顕在化したニュー・エコノミーの観点からのものにほぼ排他的に依拠してきたといっても過言ではない。本研究は、こうした説明を背後仮説として保ちつつ、「就業構造」という具体的対象を丹念に集積した実証的・数量的データを基に詳細に検討し、一方で「野宿」の背後にある社会経済的構造変動の具体的位相を立証すると同時に、他方で「落層」仮説（＝通常勤務者の野宿生活者化）を実証的に反証することに成功している。従来の野宿者対象研究が、差別問題・貧困問題に限定されてきたなかで、その構造的要因を「就業構造」という切り口から明らかにするという作業自体の独自性と、その作業からもたらされる結果の意義は高い評価に値するものといえる。

第1部は、本研究全体の導入部分であり、先行研究の整理と戦後都市下層の就業構造の変容が論じられている。第1章では、都市下層および寄せ場研究におけるこれまでの学説研究を渉猟し、それが主に貧困問題研究における社会政策学の系統と差別問題研究における社会学の系統に二分され、前者においては階級構造論、後者においてはイデオロギー論の枠組みの内部にあることを指摘し、本研究の研究史上の独自性と意義を明確にしている。第2章では、こうした整理の上に、戦後から高度成長期を経て近年のニュー・エコノミー期にいたるまでの期間を対象に、都市下層の就業構造の歴史的変容過程をたどり、雇用構成の変容が日雇い労働市場に及ぼす影響がたどられ、野宿生活者急増の構造的背景が描き出されている。伝統的な社会病理学上の主題に対して、労働市場論の観点からアプローチする論点を明確にしていると評価できる位置取りである。

第2部は、野宿者急増の主因とされている90年代の釜ヶ崎への求人数の急激な減少の要因と、この減少がもたらした労働者の手配の変化を具体的データに即してさぐっている。第3章では、近畿地方の建設出来高の動向と釜ヶ崎の求人との動向の関係が、1980年代後半から1990年代の前半にかけて量的・質的に変化していることを、独自に合成した時系列データに基づいてきわめて明瞭に示され、マクロの労働需要と釜ヶ崎日雇い労働市場との関係の変容の位相が説得的に提示されている。第4章では、求人の過半を占める「土工」に注目し、90年代前半における大阪府の土工の年齢構成・賃金構成のなかで釜ヶ崎の日雇い労働者層がどこに位置づけられるかを明示した上で、大阪府の土工全体のなかで若年労働者層および高賃金労働者層が増大し、釜ヶ崎の日雇い労働者層の占める割合が減少していることを、技術革新論の主眼の一つである「多能工化」論を組み入れつつ論証している。第5章では、第3章と第4章における変容を「就業構造の変容」と「寄せ場の変容」という観点から総合的に整序し、若年労働者層における低賃金化と高齢労働者層における高賃金化の同時進行する事態を的確に論証し、同時に技能と年齢という基準によって労働者を選別する労働者の手配様式における変化とこうした事態の進行との相互関係が指摘されている。使用されているデータは基本的に官庁統計に依拠しているとはいえ、こうした観点からの長期にわたる時系列上のデータはそれ自体として重要な独自性が認められるものであり、総じてこの第2部は、建設労働における就業構造の変容が釜ヶ崎と建設労働市場との接合様式の変容をもたらした点を説得的に論証しており、労働市場論からのアプローチの利点が遺憾なく発揮できると見ることができる。

第3部は、1999年に大阪市内の野宿生活者を対象に実施された「野宿生活者（ホームレス）に関する総合的調査研究」の「聞き取り」データと、西成労働福祉センターの業務統計を基に、「職歴」に関する時系列分析を

行い、野宿生活者の職業移動と地域移動の詳細を明らかにしている。第6章は職業移動を対象に、野宿生活者が野宿にいたるまでに経由してきた転業がランダムなものではなく、同一産業、同一職種に就く蓋然性が高く、初期においては製造業などの現場労働、後期では建設労働が多いこと、またその移動経歴に置ける職種は丁稚・住み込み、日雇いなどの非現代的性格を帯びていることを立証している。第7章では、地域移動に焦点が合わされ、地方から大都市へという主動向を確認した上で、初職では製造業の工員として集団就職や縁故を通じて、そしてまた初職以外では手配師などを介した建設日雇い労働者として都市に流入している経路が明らかにされている。従来の職歴調査が最長職と直前職という指標に限定されていたのに対し、職歴の全体像をデータとしたこの第3部は、野宿生活者の「経歴」と「移動」の全体像の解明にとって重要な側面を初めて明らかにしたものであることができ、独創性という観点からは高い評価に値するものといえよう。また、ここで得られた知見は、社会的に流布した「落層」仮説に対して、いわば「伝統的」都市下層の延長としての「野宿」という側面を際立たせた論考として、重要な社会政策的含意を持つものといえる。

以上のように、本論文は野宿生活者急増の構造的要因を、都市下層における就業構造の変容という観点から明らかにしようとしたものとして、そのアプローチとデータ、そしてまたその論証結果において、学術的また実践的に評価に値する優れた研究成果であるとみることができる。

使用したデータに関する方法論的自覚の厳密さ、また「大阪」あるいは「釜ヶ崎」という固有地域空間に対する目配り、さらに野宿生活者析出の「説明」を可能とする包括的枠組みの構築などにおいて、なお望まれるものがあるとはいえ、それは論者の限定した主題に関する論述の価値を貶価するものではない。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。